

# 京都のあかり

---

京都らしい夜間景観づくりのための指針



## CONTENTS

### 京都の夜間景観

夜間景観とは ..... 2

どうすれば魅力的な夜間景観ができるのか ..... 4

京都らしい夜間景観 4 つのキーワード ..... 6

【コラム】これまでの取組 ..... 8

### 大切なルールや手法

夜間景観を向上させる 7 つの原則 ..... 10

1- グレア（不快なまぶしさ）の抑制

2- 適切な色温度

3- 演色性の配慮

4- 快適な陰影のバランス

5- 鉛直面の明るさ

6- オペレーション

7- 環境に配慮した照明

要素別の照明手法 ..... 14

1- 現代建築

2- 町家・神社仏閣

3- ランドマーク

4- 広場

5- 緑

6- 水辺

7- 屋外広告物

8- 道路



## ケーススタディ

|         |    |
|---------|----|
| 9つの類型   | 26 |
| ① 繁華街   | 28 |
| ② オフィス街 | 30 |
| ③ 花街    | 32 |
| ④ 住宅街   | 34 |
| ⑤ 商店街   | 36 |
| ⑥ 高瀬川沿い | 38 |
| ⑦ 鴨川    | 40 |
| ⑧ 文化ゾーン | 42 |
| ⑨ 公園    | 44 |

## 【コラム】夜間景観とまちづくり ————— 46

京都の市民による取組  
神戸市での取組

## 【対談】 門内輝行 (大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授) ×

面出 薫 (照明デザイナー / Lighting Planners Associates 代表)  
————— 48

## 付録 ————— 52

### 照明の基礎知識

- ・ 照明の用語説明
- ・ 光源の選定
- ・ 灯具の選定
- ・ 照明コントロール

### 照明選びのチェックポイント

# 夜間景観とは

## 景観と営み

景観の本質は地域のコミュニティのあり方や人々の営みと深く結びついているものであり、見た目にとどまるものではありません。

景観とは、まちを歩く中で感じられるものであり、気配や雰囲気、趣として感じられるものです。

「京都の夜間景観」と聞くと、夜のまち並みだけでなく祇園祭や、大文字五山送り火を思い浮かべるかもしれません。これらも、京都の人々の慣習や営みが受け継がれ、歴史や文化に深く根付いた夜間景観だと言えます。

1200年を超える悠久の歴史をもつ京都のまちの魅力は、人々が京都の自然や文化を大切に思う気持ちや、生き活きた暮らしや営みに支えられています。

## 多様化する社会

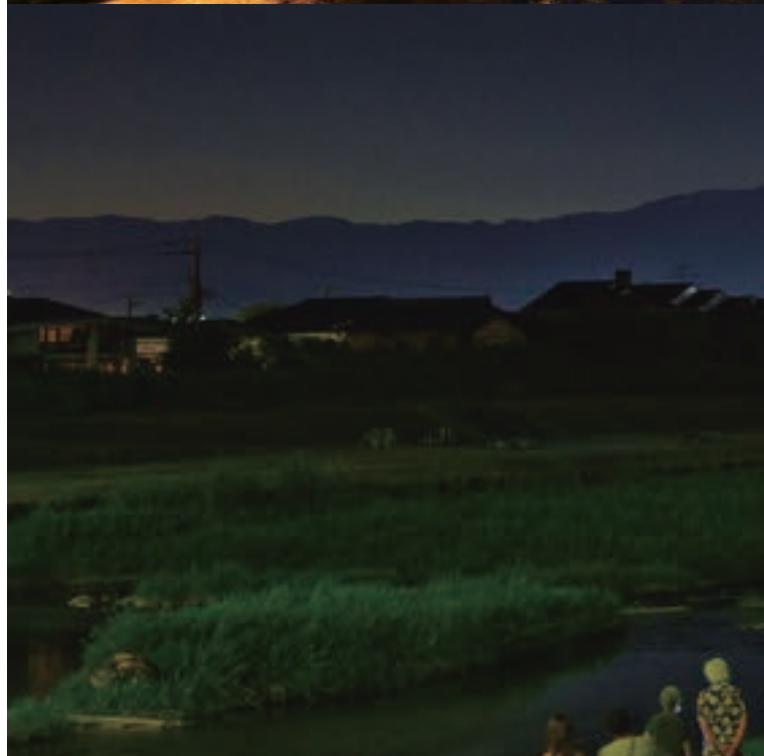
現在、人々の時間の使い方や働き方、楽しみ方はますます多様になり、様々な価値観を持つ人々が京都に暮らし、また訪れています。

多様化する社会の中で、誰もが安心して楽しめる魅力的な京都とはどのようなものでしょうか。また、夜にあって、京都の伝統的なまち並み、歴史や文化を感じられるようなあり方はどのようなものでしょうか。

都市の中ではそれぞれの場所で、それぞれの人々が思い思いの活動をしています。

仕事を終えて家に帰る人やこれから働きに行く人、眠る人、遊ぶ人、旅行者など様々な過ごし方（＝アクティビティ）をしている人々がおり、同じ人であっても、時と場合によって立場を変えながら過ごしています。

このように多様な人々の多様なアクティビティが、互いに交じり合っているのが京都の魅力ではないでしょうか。







## みんなでつくる夜間景観

美しい景観は規制だけでできるものではありません。

夜間景観を創り出すあかりには、住宅から漏れるあかりやお店のあかり、看板、街路照明など様々な要素があります。

夜間景観づくりを進めていくためには、それぞれの地域特性や時季に適したあかりのあり方を考えていく必要があります。

この指針はなにかを規制するものではなく、照明の基礎知識から、照明による演出と人々のアクティビティとの関係、それぞれの地域の個性に応じた夜間景観づくりのヒントなどが詰まっています。

自分の家や仕事場、お店あるいは地域全体の夜をどうしていくかを考える際の参考になればと思います。

さらに重要なことは、この指針が、夜の過ごし方や夜間景観のあり方について、市民、事業者、行政の一人一人が考えるきっかけとなり、より魅力的な京都の夜間景観づくりが協働して進んでいくことです。

---

## 本指針の位置づけ

本指針は、ひとつひとつのあかりを数値基準や規制によりコントロールするものではなく、市民、事業者、行政が協働してより魅力的な夜間景観づくりを進めていくための誘導指針です。

## 指針の活用のしかた

### 「地域主体の夜間景観づくり」

地域の住民や事業者等の多様な主体が、それぞれの地域でどういった夜間景観がふさわしいかを考えていくために本指針を活用します。地域の夜の魅力を再発見・共有し、より良くしていくための取組を京都市が支援していきます。

### 「民間施設の整備に伴う夜間景観づくり」

優良デザイン促進制度における夜間景観の専門家による助言等を行い、夜間景観の魅力向上に資する計画となるよう誘導していきます。

### 「公共施設の整備・更新に伴う夜間景観づくり」

大規模な公共施設（建築物や公園等）の整備や、大規模な道路整備・改修に伴う街灯の整備・更新を行う際には、本指針を活用し、コストや管理などの課題も加味しながら夜間景観づくりについて検討します。必要に応じて地域の意見を聞きながら、照明の設計・整備に反映していきます。

# どうすれば 魅力的な夜間景観が できるのか

魅力的な夜間景観とは何でしょうか。

夜間景観をつくることは「あかり」について考えることでもあります。

都市のインフラとしての照明は、

交通や歩行の安全を担保したり、犯罪を抑制する

「安心・安全のためのあかり」であることや、

省エネルギー、光害の防止など、サステイナビリティ（持続可能性）に配慮した  
「環境にやさしいあかり」であるということが求められます。

しかし、それだけでは魅力的な夜間景観づくりには十分ではありません。

京都らしいあかりのあり方とはなにか。

京都らしさを演出する「都市の個性を表現するあかり」や

「快適なあかり」のための、照明の選び方や手法、

地域の特性に合わせた組み合わせ方などを整理しました。



都市照明に求められる基本的な役割

安全や防犯のためのあかり

環境にやさしいあかり

+

魅力ある夜間景観をつくるために

都市の個性を表現するあかり

京都らしいあかりを象徴する

4つのキーワード (→ P.6)

- ① 歩いて楽しむ心地よいあかり
- ② やわらかな暖かいあかり
- ③ 地域ごとの特性に合わせたあかり
- ④ 陰影礼賛 暗がりも大切に

快適なあかり

夜間景観を向上させる7つの原則

(→ P.10)

- ① グレア（不快なまぶしさ）の抑制
- ② 適切な色温度
- ③ 演色性の配慮
- ④ 快適な陰影のバランス
- ⑤ 鉛直面の明るさ
- ⑥ オペレーション
- ⑦ 環境に配慮した照明



京都らしい夜間景観

夜も歴史や文化を感じられるまち・より心地よく過ごせる夜に

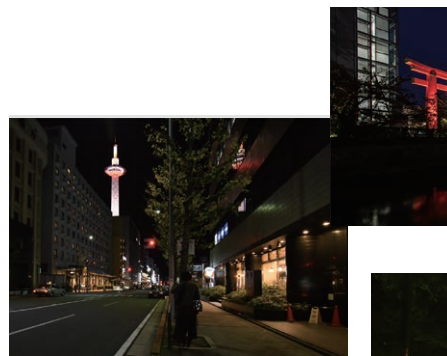
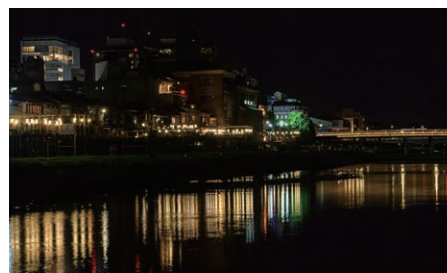


# 京都らしい 夜間景観

京都らしいあかりを象徴する  
4つのキーワード

ひとくちに「あかり」といっても様々な「あかり」があります。  
街灯、看板、人々の生活やオフィスビルから漏れる光、  
車やスマートフォンの光も「あかり」ということができます。

京都らしいあかりとは何なのか、  
調査や社会実験などを通して  
4つのキーワードが見えてきました。







## 1. 歩いて楽しむ心地よいあかり

京都の夜景は高い所から俯瞰するというよりは、歩いて楽しむものかもしれません。歩きながら、さまざまな地域や気づきと出会うことができます。

雰囲気や気配で感じる夜の景色、歩く人にとって心地よいヒューマンスケールのあかりです。

## 2. やわらかな暖かいあかり

光の色味が夜の景観の第一印象を決めるといっても過言ではありません。

歴史的なまち並みには、白々としたきつい照明ではなく、京町家の格子から漏れるような、柔らかく暖かみのあるあかりが似合います。

## 3. 地域ごとの特性に合わせたあかり

京都のまちは、地域ごとの異なる歴史や文化、特性をもった個性的なまちが重なり合って出来ています。

それぞれの個性を活かす演出によって一層魅力的な夜の景観となり、にぎわいや落ち着きなど場所ごとの適切な過ごし方（＝アクティビティ）を創出します。

## 4. 陰影礼賛 暗がりも大切に

何もかも明るく照らすことがよいというわけではありません。京都に残るほの暗さや陰影のなかに見いだされる魅力を損なわないつましさを大切に、不快なまぶしさを生み出さない配慮が必要です。

## 【COLUMN】

夜間景観づくりに向けた

# これまでの取組

## 平成30年度 夜間景観調査

「魅力ある夜間景観づくりに向けた調査業務」として、市内21箇所での夜間景観の現状調査、個性ある様々な地域において現状や課題分析を実施。

また、この中からモデル地区として4地区（岡崎地域、円山公園、先斗町・三条大橋、木屋町通エリア）を選定し、より具体的な詳細調査や改善案の検討を行いました。

## 令和元年度 社会実験

「魅力ある夜間景観づくりに向けた社会実験等実施業務」として京都市内の5か所のモデル地区（三条大橋、岡崎地域、西陣地域、円山公園、木屋町通）で、仮設の照明器具を設置した社会実験を実施。

夜間景観の魅力向上に対する効果の検証や、照明設備の設置にかかる技術的な課題等を整理しました。

- それぞれの地区の特性を活かした新たな照明手法の導入により、夜の雰囲気が大きく変わることを確認。
- 対象となるものを照らすだけでなく、周囲も含めた一体的な夜間景観づくりを行うことで、より効果が高まる。
- 歩行者にとって快適で安全な照明となるための改善点や技術的な課題を確認。

## 令和元年度 景観市民会議

「京都らしい魅力ある夜間景観づくり」をテーマに「京都市景観市民会議」を開催。たくさんの市民公募委員の方々に参加いただきました。グラフィックファシリテーションを用いたワークショップでは各テーブルで活発な議論が交わされ、貴重な意見をいただきました。

- 京都ならではの趣や暖かみのあるまちの灯りの魅力、闇や暗さとの対比の大切さ、地域ごとの歴史や文化を尊重することの重要性など、夜の景観について様々なキーワードを抽出。
- 「LED化され明るすぎてまぶしい照明が増えているのではないか」「周辺環境にそぐわない過剰な演出がされるのではないか」といった問題意識を確認。

※景観市民会議

市民の皆様からのご意見をいただく場として、平成23年度から毎年テーマを変えて開催。

※グラフィックファシリテーション

ワークショップ手法の一つ。グラフィッカーが対話をリアルタイムで見える化することで、場を活性化し、より深い議論を促すもの。



## 照明社会実験の様子

### 三条大橋

市民の憩いの場でもある鴨川の水辺における夜間景観のあり方を検討。三条大橋は木製の高欄や擬宝珠などの特徴的な意匠をもつ歴史ある橋です。京都の夏の風物詩である川床の時期に合わせて実験を実施することで、川床との一体的な景観の創出の効果が確認できました。





## 岡崎地域

「岡崎地域活性化ビジョン」には「夜の魅力創出」が掲げられており、地域の関係者が魅力づくりに取り組んでいます。岡崎地域には、京都市京セラ美術館や歩行者空間化した神宮道、平安神宮の大鳥居、疏水に架かる慶流橋など、新たな夜の魅力を創出できる資源が豊富にあります。より多くの方々に見ていただけるよう「岡崎ときあかり2019」の開催時期に合わせて実験を実施しました。



## 西陣地区（鞍馬口通）

西陣を中心とした地域は、伝統産業や伝統文化と人々の生活が息づくまちです。既存の白色の街灯に加え、地域の方々に協力いただいて、住宅の門灯や看板の照明も、暖かみのある電球色に統一しました。住宅地の雰囲気があかりの色でどう変わるか比較検討を行いました。



## 木屋町通

京都を代表する繁華街である木屋町通において、夜間景観のあり方を検討。夜間は繁華街の看板照明の明るさが目立つ一方で、昼間に風情のある高瀬川は夜は暗がりになっています。植栽や護岸を照らすことで、明るさ感が増し、安心・安全で風情ある水辺の景観が創出できました。



## 円山公園

公園や庭園における夜間景観について検討。円山公園は国指定の名勝でもあります。周辺の四条通や八坂神社からの人の流れもあり、紅葉のライトアップでは写真を撮影する人も多く見られました。公園では、安心・安全がもっとも重要です。鉛直面やアプローチとなる園路への効果的な照明で明るさ感が出ることを確認できました。



# 夜間景観を向上させる 7つの原則

1. グレア（不快なまぶしさ）の抑制
2. 適切な色温度
3. 演色性の配慮
4. 快適な陰影のバランス
5. 鉛直面の明るさ
6. オペレーション
7. 環境に配慮した照明

照明技術が進歩し、  
あまりに多くの選択肢がある中で、  
どうすれば魅力的なあかりを演出することができるのか  
照明計画を考えるうえで知っておきたい7つの原則

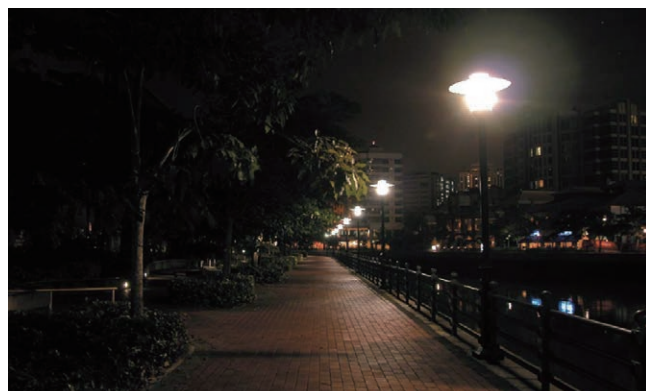
## 1. グレア（不快なまぶしさ）の抑制

### 目にやさしい景色をつくる

目に突き刺さるような不快なまぶしさをグレアという。人間の目は視界の中で明るいところに注意が向く特性があるため、夜景を楽しみたい場所にグレアがあると障害となり美しい景観を台無しにしてしまう。照明器具の照射方向に注意したり、遮光に配慮した照明器具を選ぶだけで軽減が可能。



グレアがない場所は見通しが良く景色を楽しめる。



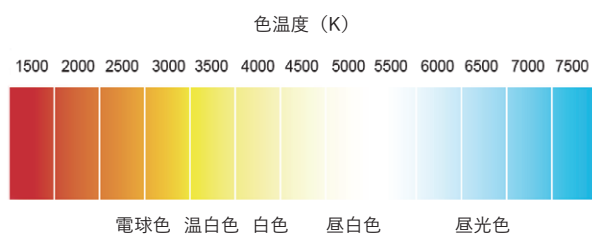
グレアがひどい場所は光源ばかりが目立ち景色が損なわれる。



## 2. 適切な色温度

### 安らぎを演出する

光源は固有の色味をもっていて、それを表す数値を色温度という。一般に白い光は日中の太陽の光に似ていて活力を与え、いわゆる電球色の橙色の光は火や日没に通じる暖かみのある色味で落ち着きを与える。古都京都には暖かみのあるあかりが似合う。場所や用途に応じて色温度の使い分けを意識することが大切。



色温度の単位を色温度単位をケルビン (K) といい、低くなるほど赤っぽく、高くなるほど青みがかったり。



暖かい色温度の光源が使われた鴨川の夜景



暖かい色温度の光源が使われた京都のまち並みの夜景

## 3. 演色性の配慮

### 自然やまち並みを美しくみせる

赤い花を白熱電球で照らした場合は鮮やかな赤色に見えるが、蛍光灯で照らすと赤色がくすんで見える。そしてナトリウム灯の下で見えれば赤色ではなく灰色に見える。このように同じ色温度を用いたとしても光源ごとに色の見え方が異なり、この色の見え方は演色性 (Ra) という指標で測られる。太陽のもとでの見え方に近いほど演色性が高く自然な色味に見える。光源を選ぶ際には演色性の数字にも注意し、演色性評価数 (Ra) は 80 以上の照明器具を選ぶとよい。



演色性が高い光源が使われている空間では各素材が鮮やかに見え、色彩の違いがはっきりとわかる。



演色性が低い光源が使われている空間では、色彩の違いをはっきりと認識することができない。

## 4. 快適な陰影のバランス

### リズムカルな光と影をつくる

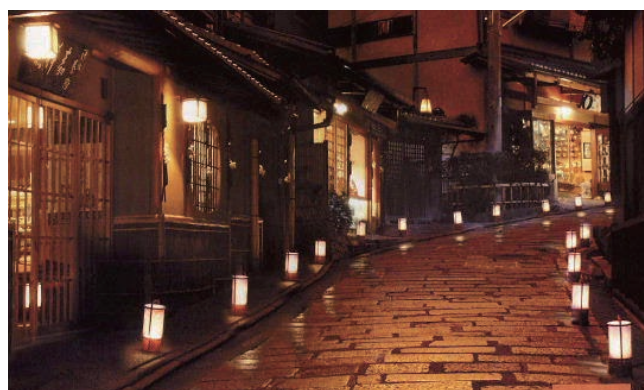
周囲が暗い光環境は人に不安感を与える一方で、なにもかも煌々と照らしてしまうとのっぺりとして魅力に欠けてしまう。

美しい景色には対象と背景のバランスが重要で、夜景では特に明暗や陰影のバランスが印象を左右する。例えば小路や広場などでは、広範囲を一定に明るく照らすポール照明は、必要以上の明るさで不要な場所まで照らしてしまうこともあり、グレアを与えたりエネルギーの浪費にもつながる。

場所と用途に合わせて照明を分散配置することで、陰影のバランスに富んだ魅力的な景色ができる。



車道と歩道、街路樹そして建物それぞれがバランス良く照明がされていて明る過ぎずまぶしさもない快適な視環境。



一般的な道路を均一に照らすような照明がなくても、道路脇に並ぶ行灯が足元を照らしており、誘導効果をもたらす。

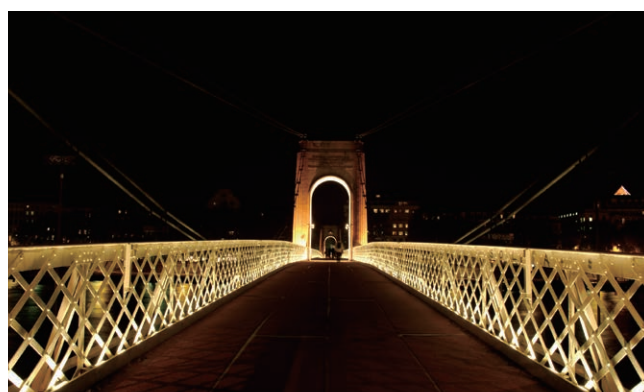
## 5. 鉛直面の明るさ

### 少ないエネルギーでまちに明るさ感を与える

わたしたちの感じる「明るさ感」や「快適性」は、視界に占める発光面積に影響される。特に鉛直面（壁面などの地面に対して垂直な面）は視界に入りやすいので、建物などの鉛直面を照らすとその空間の明るさ感を簡単にすることができる。少ないエネルギーで町中の小路や広場に明るさ感をつくりたい場合には、地面やポールから投光器で壁や彫刻物、樹木などを照らすと効果的。



竹林を照らして明るく奥行を感じる通りを演出している。



欄干の照明が明るさ感をつくりだしている。



## 6. オペレーション

### 時機に応じた光のコントロール

一晩中ずっと照明を点けておくことはエネルギーの無駄遣いだけでなく、過剰な光による生活環境や樹木など自然の生態系への悪影響にもなる。照度センサーや人感センサー、タイマーを併用して1日24時間の中で必要な時間帯と用途に合わせたライトダウン（減灯）を意識することも照明制御をするうえで大切。

四季折々に移ろう京都のまちに合わせて春は桜、秋は紅葉などハレの演出も積極的に導入することで、より季節の魅力を感じられる夜景が楽しめる。



時間帯で行う街全体のライトダウンの参考イメージ図

時間による自然光の変化の様子、そして街の夜間照明が段階的に減灯される様子を示している。

## 7. 環境に配慮した照明

### エコロジカルで経済的に照らす

「環境に配慮した照明＝エコロジカルな照明」とは、無駄にエネルギーを使わないだけでなく点検・交換などの将来のメンテナンスも含めて考えることが重要。LED は高い効率性を持つ省エネ光源であるが、必要以上に無駄な光を周囲や夜空に放置することは望ましくない。

無駄な光は、上空に漏れて星空を見えにくくしてしまったり、生態系に悪影響を及ぼすなどの光害（ひかりがい）の原因になる。求める照明効果と設置場所に合ったメンテナンス性のよい要素別の照明器具を選ぶことが大切。

